

## 多言語国家ベルギーに見るナショナリズム

A16LA

### 1. はじめに

領域的概念を用いてナショナリズムを検討するという試みがテキスト(山崎 2013; pp. 87-108)にて行われている。本レポートではまずその内容を確認したうえで、そこで用いられた理論が他の例でも当てはめられるか確認するために、多言語国家であるベルギーの政治を題材として検討を行う。

### 2. テーマの確認(第7章の論評)

本章ではまず領域的要素から「国民国家」と「ナショナリズム」の意味を再確認している。「国民国家」とは、政体、構成員、領土からなる政治的共同体としての「国家」と社会・文化的背景を共有する文化的共同体としての「ネイション」とが一致した状態を指す。しかし、両者が一致している理想的状態は現実にはなく、本文では2つの例を用いて国家の範囲(領土)と民族分布の重なり方がその国家と民族の政治的方向性に大きな影響を与えることが述べられている。一方のナショナリズムはネイションの主権・自治・自決といった集合的権利を主張するイデオロギーや運動を指す。それが成立するためにはナショナリズムが目指す国家の成立・存立に必要な土地の所有という客観的側面と、特定の土地に対する心理的愛着や帰属意識といった主観的側面の2つの領域的要素が必要であるが、こうした領域的作用は従来のナショナリズム研究では看過されがちであった。

この章ではこうした領域的要素から見た国民国家とナショナリズムの理解を踏まえ、今日的なナショナリズムの諸問題について検討している。その方法としては、「中心-周辺関係」論、「領域性アイデンティティ」の役割、「地理的スケール」によるナショナリズムの理解の3つが紹介されている。

そこで今回は、多言語国家であるベルギーにおける政治、フランデレン民族運動について先に述べた3つの面から考える。

### 3. フランデレン民族運動について

ベルギーは、人口の約6割がオランダ語圏である北部フランデレン地域、3割がフランス語圏である南部ワロン地域、1割が二言語地域である首都ブリュッセル地域に居住している多言語国家である(正躰 2009)。公用語にはオランダ語、フランス語のほかにドイツ語も挙げられる(外務省 2019)。1830年の建国以来、ナポレオン占領下でフランス語の使用が強制されたことや当時南部フランス語圏の経済発展が著しかったことなどの歴史的背景をもとに、フランス語を軸とした統一国家形成がすすめられてきた(水島 2016 ; pp. 80-102)。

これに対して19世紀後半から、オランダ語とフランデレン文化の重要性を訴える民族運動がさかんになった。しかし20世紀半ばになってもフランス語優位は継続したため、第二次世界大戦中にはフランデレン民族運動はナチ・ドイツの占領軍に協力し、フランデレンの分離を考えたことさえあった。

そうした動きの中で戦後2つの政党が生まれた。連邦制の導入や言語共同体の設立を要求したフランデレン民族同盟(VU)と、そこから分離して成立したのがポピュリズム政党であるフラームス・ブロック(VB)である。

フラームス・ブロックはフランデレン民族同盟の急進派に各種のフランデレン民族勢力や極右勢力の集まった政党である。1980年代からこの政党は反移民・反既成政党を前面に出す戦略に転じるようになると、1988年にはフランデレン地域であるアントウェルペンの市議会選挙で17.7%の票を獲得し、1990年代には国政でも躍進を続けた。ただし同党は2004年に反人種差別法違反により、解散することとなり、後継組織としてフランデレン・ベラングが設立されている。両者は事実上の同一政党である。(水島2016; pp. 80-102)

こうした民族運動が展開されていく中で、ベルギーは1970年の第一次改革を皮切りに分権化をすすめており、1993年に単一国家から連邦制度へと移行した。

#### 4. ベルギーの連邦制について

1993年の憲法改正によってベルギーは連邦制度を採用することになった。この制度には連邦政府、フランデレン地域、ワロン地域、そしてブリュッセル首都地域の3つの「地域」政府、フランデレン共同体、フランス語共同体、ドイツ語共同体の3つ「共同体」政府と呼ばれる、3つのレベルが存在する(正躰2009)。

この連邦制度の最大の特徴は、地理的領域性に基づく「地域」と非領域的概念の「共同体」という2つの構成体を併用している点である。「地域」は領域内の経済的権限を中心に役割を果たし、「共同体」は国民の言語・文化にかかわる事柄について権限を行使する(正躰2009)。

こうした連邦制度の誕生は、「中心-周辺関係」論によって説明することが出来る。まずベルギーでは建国以来フランス語を基礎として統一政策がとられてきた。これは中心が周辺共同体を行政的・経済的・文化的という3つの「システム構築」の過程をとおして周辺共同体を取り込む動きとして捉えられる。本来オランダ語圏であったブリュッセルのフランス語圏化の進行(水島2016; pp. 80-102)などが典型であろう。こういった動きに対して、周辺(フランデレン地域)が反発した結果がフランデレン民族運動であり、連邦制度の創出であろう。

しかし、単純にオランダ語圏とフランス語圏が明確に分かれ、均質な領域に居住しているわけではない。その例としてBHV選挙区を紹介する。

BHV選挙区はブラバン州の3つの選挙区の中の1つである。ブラバン州は言語

境界線にまたがって位置しており、1993年の連邦化に際して北部フランデレン・ブラバント州と南部ブラバン・ワロン州の2つに分割されることになった。その分割の際、BHV以外の2つの選挙区はオランダ語圏もしくはフランス語圏のどちらかに属していたため問題とならなかったが、BHV選挙区が問題となった。オランダ語圏のブラバント州とフランス語話者の多いブリュッセル首都圏地域をカバーしていたからである。

結果としてBHV選挙区は二言語選挙区として維持されることになった。フランデレン地域政府が主張したブリュッセル地域からフランス語系住民の多い選挙区を分離する案は実現されなかった。

このようにベルギーでは、言語圏といった領域で単純に政治を分けるのではなく、少数者に配慮した非領域的な政策も実施している。

## 5. VBの移民排斥

3章で紹介したフランデレン・ブロック(以下VBとする)の取った移民排斥運動についてこの章では検討する。

フランデレン・ブロックは先にも述べたように、1977年にフランデレン民族同盟から分離して出来たポピュリズム政党である。結成当初は初代の党の指導者であるカレル・ディレンの1議席しか議席を持たなかったが、1980年代の改革によってその存在感を増していく。

まず党内の人材を入れ替えるために優秀な若手をリクルートし、同時に党のイメージにあった極右勢力に支えられた党という印象を払しょくしようとした。さらに、1980年代になってイデオロギーを変化させていく。新たなイデオロギーの中心は反移民・反既成政党であった。今回はこのうち反移民に注目していく。

1980年代後半、VBは新たな党首となったデヴィンテルを軸として、フランデレン地域の都市であるアントウェルペンの貧困地域で反移民のプロパガンダを行う。その際には、失業や犯罪、都市の荒廃といった問題の原因を移民とし、移民を排斥すればこの問題は解決できると、単純化された主張を行った。さらにフランデレンの小都市リールにモスクを建設する計画が持ち上がった際には、ムスリムによるヨーロッパの「逆植民地化」、つまりヨーロッパのイスラム化がすすめられているという論を用いて反対運動を展開した(水島 2016 ; pp. 80-102)。

また、1993年の連邦制への移行後も主要な税収が連邦政府、つまり国家の管轄におかれ、社会保障費も連邦の財源によって賄われていたため失業率の高いワロニー(フランス語話者)への社会保障給付は、地域間の財源移転として理解された(水島 2016 ; pp. 80-102)。こうした状況に対してフランデレンの人々は、1970年代以降は経済的にワロン地域を圧倒しており、もともと人工的にも多数

人口

論文の  
金頁は  
示す必要は  
ない。

派であるにもかかわらず、フランス語が優位に立っているようなイメージや現実にはワロン地域に対して相当の財政負担を背負っているということに対する不満を持っている(正躰 2009)。統一されたベルギー国家自体を歴史的な誤りとし、フランデレン独立を掲げた VB は、そうした人々から支持を集めた。

VB のナショナリズム的な主張とそれに対する支持の広がりとは「地理的スケール」を用いることによって理解できる。

ヨーロッパでは 1993 年のマーストリヒト条約によって EU という超国家機関が成立し、それに加盟したベルギーは国家権限の一部を EU に委譲した。さらに EU のマイノリティ言語の保護を要請する政策によって国内少数民族の自治権強化がおこなわれ、ベルギーでは連邦制の中に 3 つの「共同体」政府が出来た。こうした動きの中で国家権限はより大きなスケール(EU)や小さなスケール(共同体)に移された。これが「国家の退場」と呼ばれる現象の一つである。また、EU の前身である EC(ヨーロッパ共同体)が 1980 年代に生きがい移民を受け入れたことで、EU が成立した後もトルコや北アフリカ出身のイスラム教徒が EU 内に定着した(山崎 2013; pp. 87-108)。

VB は 1994 年のアントウェルペン市議選において得票率 28.5% を獲得し、2006 年の市議選では 33.5% にも達した。こうした「国家の退場」にともないナショナル・アイデンティティが動揺し反発する動きが、VB の反移民の主張とそれに対する支持として確認されることが、ここから理解できる。

ただし現代、つまりグローバル化時代のナショナリズムを国家の領域性の中だけにとどめることはできない。例えば近年ヨーロッパのポピュリズム政党の国境を越えた連携が進んでおり、2008 年には「イスラム化に反対する都市連合」が結成された。VB の後継組織であるフラムス・ベラングの党首デヴィンテルはオーストリア自由党のシュトラッヘらとともにこの運動を主導した。このように、現代のナショナリズムは、国境を越えて拡散するエスニック集団の複雑なネットワークのなかに位置づけることも必要であることも認識しておかなければならない(山崎 2013; pp. 87-108)。

計 4085 字

#### 【参考文献】

正躰朝香 『ベルギー政治の不安定化と連邦制：「非領域性原理」の後退から考える』京都産業大学論集 社会科学系列 26, 171-18-6 2009 年

山崎考史 『政治・空間・場所 「政治の地理学」にむけて[改訂版]』ナカニシヤ出版 2013 年

水島治郎 『ポピュリズムとは何か 民主主義の敵か、改革の希望か』中公新書 2016 年  
日本外務省 IIP 「ベルギー王国 基礎データ」

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/belgium/data.html#section1> (2019/2/5 閲覧)

よくまとまっています